

Fancy Fragments of "Fantasy" Fitted For Feasible Facts Epilogue — Find False Flag —

札幌市医師会
華岡青洲記念病院

はなおか けいいち
華岡 慶一

文章を書くことを、ブレーズ・パスカルは、「考えることである」と言い、フランシス・ベーコンは、「人を確かなものにする」と言い、デレク・ハートフィールドは、「自分とまわりの事物の距離を測ること」だと言う。パスカルは帰納的懐疑論者として、デカルトとは違った意味でフランス人らしいし、ベーコンはいかにもイギリス経験論の始祖らしい。だが、私には最後のハートフィールドのフレーズが一番しっくりくる。その理由は——知る限りの情報からすると——創作者の愛読書や親子関係に類似点が多いと勝手に思っている。今回、自分の発想の変遷が乱読していた「世界の名著」「世界の歴史」を介した哲学史、社会学史のなぞり（西欧中心の気紛れなアンソロジーとして）のようで面白かった。大陸合理論、イギリス経験論、ドイツ観念論、ヘーゲルの進歩史観とマルクスの唯物史観。実存主義、構造主義、ポスト構造主義と表面的ではあったが、その時代の問題意識の推移を追いかけてきた。そしてドゥルーズ・ガタリの実践の真似事に至った。国内でも社会学者の宮台真司（同学年で、面識はないがある時期、同じ空間を共有していた）の言説には——好き嫌いはあるだろうが——同年代の人間の悩める感性を刺激する共通の源泉に曝露した感覚がある。その経験を通して、重要なのは場所（フィールド）ではなく——人から与えられるものに頼るのではなく——自分の心と行動なのだと悟った。自分の心の内へ向けた視点をズームアウトして、個体を離れ、視野を広げ、アイロニーの感度を上げ、複眼、俯瞰的に表現をすれば——注目大家（authority）の抽象（abstraction）を注視（attraction）して注釈（annotation）してきたが、所詮は、自分中心で、人の忠告（advice）なんて注意（attention）しないくせに、注力（action）してから言え——と気付いた（観測した）時に過去の状況が確定した（量子ベイズ理論）のではないか。

今こそ、まさに意識は「Je pense, donc je suis」「Cogito ergo sum」となった（量子脳理論）。

最後に私にとっての「書くこと」について。

個人と世界（社会）の現実との葛藤の精神史から、自分の中にフラクタル的状况再現を試み、検討すること、それが私の読書、思索であった。一方、書くことは、その思索の先にある自分だけの叙事詩・叙情詩を書くことである。

書くことの意味とは、書くに値することを見つけて作業することによって経験したことを記号化することにある。仕事で出合う科学論文でも同様の記号的表象化がなされる。当然、文字の向こうに実験、試験の意図、目的の本音が透けて見える。だからこそ本質を追いかける気概が問われる。最初は、他人

にとっては無価値な、ただの個人の好みで始まった着想でも、そこに共有すべき真実があるなら、それを抽出して、言語的に再現できる証明をしなければならぬ（経験論的帰納法）。多くの天才は、乱暴に言えば、答えが先に浮かんでいて、それが相応しい問題を考えるのに多大な時間と労力をかけている。アインシュタインの「ベルンのひらめき」は相対性理論には相応しかつたが、量子論（確率解釈）ではなかった（神はそのサイコロは振らなかった）だけだ。

今日、読むに値する科学論文を書くには、ひらめきだけでなく、多大な労力と資本（運を含めた）を必要とする。

今こそ、医学研究における科学の底力（本質）が問われている。だからこそ、世界では、選択と集中が起こっている。それは、未踏を旅する宇宙飛行士にとっての誤謬——研究結果が惹起するかもしれない——は、即、重大な結果を招くからだ。

私も、かつては、駄文の集積の先に暇潰しはあっても傑作はないと思っていた。

しかし、傑作は決して名文集ではない。自分の領域でも最近、ガイドライン（名作であるべき名文集）のコペルニクスの転回がESCで起こった（いつも事件は欧州で？）。私にも確信はあったが名作を書く実力（実行資本）がなかったために、発信活動に留まっていた（声は大きかったが）。一方、米国では利害の壁は厚いが、時期到来と見ると変わり身は早い。一気にあらゆる資本の選択と集中が行われる。日本では概念はよくても（名文）実行資本が伴わないために駄作化していくことは、なにも最近になって始まったことではない。大東亜戦争もその一例である。駄文（独りよがりの論文）も、本当のこと（言語論的には偽旗の否定）とは何かを考える一助になる意味はあるかもしれない。しかし、自己拘泥——実行資本の裏付けによる開発と改良を伴わない——は、微笑ましいが痛々しい。ならばいっその事、自家撞着に至り、駄文の名作を書く愚かな賢者の不在証明となることも、それ自身の存在意義になるかもしれぬ。僕の中で、このエッセイの意味はそんなところだ。自分に留まらず、人を巻き込んで仕事をするからには、自分の思考理由と過程を書くことにした（吟味可能な表明として）。書かれたものからの循環論法などの詭弁の発見は分かる人には容易だ。さらに、書くことで自分を俯瞰的に見て、客観視して、他者に対して上から目線の同情や独りよがりの救済をやめた。だって、他人と同じ絶対現実はこの私の世に存在しないのだから（エヴェレットの多世界解釈）。

おかげで「世界は、見かけに騙されてはいけない」と悟った。……果たして、私たちは、進歩してきたのであろうか。ロシアのウクライナ侵攻の報道を見ながら、あの真珠湾奇襲の背景との類似を感じた。予告による抑止（deterrence by disclosure）は与太話となった（decline）。「ソーニャ（慈愛の聖母の象徴）に出逢ったと思ひ込んだラスコーリニコフ（ラザロの復活の象徴）」こそが、誑感しやすく危険だ（deceivable and dangerous）。

今こそ——Find false flags (fakes) —— 焚き付け（build a fire）て、退路を断たせた（burn the bridges）者の存在を。